慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	価値時差論
Sub Title	
Author	高城, 仙次郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.12 (1918. 12) ,p.1725(91)- 1742(108)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19181201-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

（廣告主へ御注文の節は三田學會雜誌廣告に依る旨御附記を望む）

内務省東京衛生試験所試験濟

滋養の王

浪花印スッポンあしべ煮

（鑵詰）

心臟、神經衰弱、脚氣、不眠症、胃腸の疾患一切、肺膜炎、肺結核、月經不順、痔疾リウマチ、産前生後、病後の疲勞一切によし

東京麻布 飯倉四ツ辻

商標

スッポンスープ及びあしべ煮製造販賣元

浪花合名商會

電話芝六七五四

電略（ナニハ）又ハ（ナ）

意匠新なる

小林洋服店は

御客樣の格構に應じて

十人十色に作ります

先づ迷はずに學校歸の其足で

慶應義塾前

小林洋服店

雜錄

價値時差論

高城仙次郎

第一節 緒言

價値時差に關する經濟現象は今を去ること八十餘年前蘇國人ジョン・レイに依りて初めて明確に說明せられたるも、不幸にして經濟學者の注意を惹くに至らざりしが、十九世紀の末葉に及んで墺太利の經濟學者ベンバウェルク氏はレイとは獨立に價値時差の現象を一前提として氏獨特の利子論を發表せし以來、各國の經濟學者中に價値時差の經濟法則上に於ける地位の重要なることを認め其現象を研究する者續出するに至れり。就中米國理論經濟學者中の先覺の一人たるフェター氏はベンバウェルク氏の時差說に改訂を加へ更に同國數理經濟學者の泰斗たるフィシャー氏は精密なる研究と解說とに依りて價値時差論を大成せり。以下予の說述せんとする價値時差說は此等先輩の研究を出發點として之に卑說を加へ、予自身の立脚地より且予自身の叙述方法に依りて解說せるものなりとす。(註)

註、ジョン・レイは千八百三十四年米國「ボストン」市に於て發表したる Statement of Some New Principles on the Subject of Political Economy, Exposing the Fallacies of the System of Free Trade; and of Some other Doctrines Maintained in the "Wealth of Nations" と題する著書に於て價値時差に關する現象を說明せり。尤もレイの論ぜるは desire for accumulation(蓄積心)にして、價値時差說とは反對の方面より同一の現象に對して觀察を下したるものなり。從つてレイの所謂蓄積心の熾んなる者は價値時差の低き者なり。此レイの價値時差說は米國の經濟學者ミキスター教授がレイの著書に改訂を加へて出版せる The Sociological Theory of Capital, (1905), Chap. VI に載す。尙は、ベンバウェルク・フヨター及びフィシャーの三氏の說に就きては左に掲ぐる數書を參照せよ。
Böhm-Bawerk: Positive Theorie des Kapitales, I Band,

3te aufl, (1909), Buch IV, abschnitt 1.
Fetter: Economic Principles, (1915), Part IV.
Fisher: The Rate of Interest, (1907) Chap VI.

ジョン・レイ以前に我國に於て價値時差の原則を發見せし者ありとの說あり。（法學博士瀧本誠一編『日本經濟叢書』第十八卷『海保青陵經濟談』解題十二頁）。德川幕府時代に於ける我經濟學者の一人として知らるゝ海保青陵は文化十年に著はしたる『稽古談』第一卷に於て資本財が物を生産するの事實を指摘したる後、

『物によりて遲速あるゆへ、利息の多少なふてかなわぬことなり』

と論斷せり。（同上書百九十五頁）文化十年は西曆千八百十三年に當る。然るにレイが前揭の著述を發表せしは千八百三十四年なるを以て、若し稽古談より右に引用せる一節が價値時差を說けるものなりと解することを得ば青陵はレイよりも三十一年前に價値時差の現象を說明したるものなりと云はざる可からず。されど、青陵の指摘せるは、前後の文意に依りて之を推定するに、價値時差其物よりは寧ろ利息に及ぼす所謂生產財の生產力の影響なるが如し。『物によりて遲速あり』とは『貨物の生產に要する時間は貨物の種類に依りて一定せず』の意義にして、生產財の生產力が物に依りて異なるとの意味ならんか。蓋し、甲の生產財が一ヶ年間に百單位の貨物を生產するに反し、乙生產財は同期間に二百單位の貨物を生產するを云ふことゝ、乙生產財は半ヶ年間に同量の貨物を生產すると云ふことゝの間には殆んど何等の懸隔なければなり。若し果して然らば、青陵の論じたる所は價値時差說よりは寧ろ生產力說に近きものなりと解するを至當となすが如し。

第二節　價値時差の現象

價値時差とは現在財と將來財との間に存する價値の等差を云ふ。例へば、今日引渡さるゝ白米に對して消費者が一斗に付三圓を支拂ふを辭せざる際に、若し來月の今日に引渡を契約する白米に對しては今日二圓九十錢以上を前拂することを拒絕することありとせば、其差十錢は即ち此消費者に對する白米の一ヶ月間の價値時差なりとす。

されど、予は此價値時差の存在を證明するに最も有效なる一方法は新聞紙の號外の賣價を指摘するに在りと信ず。或る日の午後に發行せられたる新聞紙の號外に揭載せる突發的椿事に關する記事は翌朝の新聞紙に轉載せらるゝを常とするを以て新聞紙の購讀者は翌朝迄待てば、何等特別の費用を要せずして、其記事を通覽することを得るに拘らず、特に金一錢を投じて街頭の賣子より一葉の號外を求むるは何故なりや。此一葉の號外は翌朝とならば全然無價値のものなるに一錢にて之を購入するは、購入者に對しては此號外は其日の午後少くとも一錢の價値を有する故に非ずや。此號外を翌朝引渡す契約を以ては何人も其午後一錢は愚か一厘だも支拂ふものなかる可し。從つて其午後の號外と翌朝の同一號外の間には少くとも一錢に上る値開を存せりと云ふを妨げず。是れ即價値時差に外ならず。

此號外の賣價に關する現象は價値時差の極端なる一例なるが、他の大多數の貨物に就きて云ふも、程度は異なれど、同一の原則の行はるゝを見るなり。例へば吾人が食料品、衣服、器具等を

ば明年よりは寧ろ今日之を入手せんと欲するは直ちに使用又は消費し得る貨物の効用は將來使用又消費し得る貨物の現在に於ける効用よりも高きが故なりとす。企業家の資金に就きて云ふも亦同じく、今日利用し得る一萬圓の資金は明年の今日始めて使用し得る同額の資金よりも多くの價値を有するは多言を須ひずして明かなり

然りと雖も、總ての場合に於て現在財は常に斯くの如く將來財よりも價値高しと云ふを得ず例へば、大正八年一月に於ける氷の價値は同年七月に使用し得る同質同量の氷が同年一月に於て有する價値よりも低し。又、夏期に於ける木炭の價値は其次の冬期に入手し得る木炭が夏期に於て有する價値よりも低きことあり。從つて單に價値時差と云ふも、財貨の性質に依りて、現在財が將來財よりも多くの價値を有するを意味することあると同時に夫れと正反對なる現象

を指示することもあり。然りと雖も、大多數の場合に於ては現在財が將來財よりも價値高しと斷言するを憚らず。

而して最後に讀者の注意を促さんと欲するは價値時差の現象が貸借利子と密接なる關係を有するも、此兩者は決して同一物に非ざるの一事に外ならず。貸借が全然行はれずと假定せば、利子及び利子歩合の現象は勿論存在することなきも、價値時差の現象は存在せり。社會主義を實行して、金錢の貸借を絶體に禁止せば、利子又は利子歩合の現象は消滅す可きも、價値時差は之を根絶するを得ざるなり。(註)是れ尙ほ貨物の賣買制度を廢止せば、價格又は市價の現象は消滅す可きも貨物の價値に關する觀念の依然として存在するに異ならず。

註、瑞典の經濟學者カッセル氏は社會主義を實行する處に在りても利子現象の存在する事ある可きを說けるも氏の議論は何等かの形式に於て貸借の行はるゝことを前提とせるが如し。貸借が行はるゝ限り、社會の組織の如何に拘らず利子現象の存在す可きは勿論なりとす。(G. Cassel : The Nature and Necessity of Interest, London 1903, pp. 173-9. を見よ)。

第三節　貨物の價値時差の原因

吾人の總ては價値時差を經驗するものなるが何故に各個人に對して現在財は將來財に比して高き價値を有するを常となすや。是れ吾人の次に闡明するを要することなるが、貨幣の價値時差と貨幣を除きたる他の總ての財貨の價値時差とは多少其の趣きを異にせる所あるを以て、本節に於ては便宜上先づ貨幣以外の財貨に存する價値時差の原因を說述し貨幣の價値時差に對する說明は次節に讓らんと欲す。

抑も、現に存在する貨幣以外の財貨が將來財よりも價値高きは現在の欲望が將來の欲望よりも强烈なるが故なりとす。茲に將來の欲望と云ふは將來に發生す可しと現在に於て人の豫想する欲望を云ふ。例へは、吾人が今日食欲を有するが如く、明日も亦同樣に食欲を有す可しと豫想せる場合に於ける此の明日の食欲は即ち吾人の所謂將來の欲望に外ならず。而して外を除き吾人は常に明日よりも寧ろ今日貨物を消費又は使用せんと欲するものなり。總ての人は食料品、衣服、家具、娛樂器等の享樂財をば、又企業家は製造工場、器械、原料等の企業に必要なる貨物を來月利用するよりは寧ろ今月、今週又は今日之を消費若くは使用せんと欲せり。

然らば、何故に現在の欲望は將來の欲望よりも强烈なりや。曰く、(一)假りに例を食料品に取らんか、若し今日食を取るを得ざらば、吾人は生を全ふすることを得ず。而かも生命は通常吾人の最も主要視するものにして、生命を斷たば萬事休するものなるが故に、是れが維持には他の總ての物を犧牲とするを躊躇せざるの常なり。『自己保存は最も重要なる自然の原則なり』との西洋の格言は即ち之を謂ふに外ならず。今日各文明國に於ては如何なる場合に於ても故意に他人を殺傷する者を重刑に處するを刑法の一原則となすも、而かも尙ほ正當防衛に基く殺人罪は之を問はざるの除外例を設けたるも亦此人情を顧慮せる爲めに外ならず。今日一粒の米、一片の肉なかりせば、數日後に如何程多量の米、肉を得ることが判然せるも何かせん。(二)衣服、器具等の貨物に在りては、食料品に對するが如き熾烈なる欲望を有すること稀なるも、尙ほ人は將來よりも現在に於て之を入手せんことを希望せり。而して生命を全ふする爲めには必ずしも絶體に必要ならざる此等の貨物に對しても現在の欲望が尙ほ將來の欲望よりも强きは次の二原因に基くものなりとす。曰く(甲)各個人の現に所有せる貨物は其欲望を充たすに足らず、且

つ(乙)人は現在の缺乏を感すること將來の缺乏を豫想することよりも切なり。以下少しく此兩現象に就きて說かしめよ。

(甲)若し現在各個人の所有し且つ自由に消費又は使用し得る貨物の品質並に數量にして總ての欲望を滿足せしむるに充分なりとせば將來財よりも現在財に對して强き欲求を有するが如きことなかる可し。されど、クリーサスと雖も、總ての欲望を充たすに足る貨物を有せしとは信ずる能はず。予は欲望は無限なりと爲す一派經濟學者の說を謬見なりと看做すものなりと雖も尙ほ殆んど總ての人が常に或種の滿たされざる欲望を有せることを否定する者に非ず。即ち欲望の數は有限なりと雖も、欲望を滿たす爲めに用ひ得る貨物の現存量は更に有限なり。若し假りに一步を讓りて貨物の現存量が人の欲望を滿たすに充分なること空氣の如くなりとせば、貨物も亦空氣の如く殆んど何等の交換價値を有せざる可き筈なるに、(註一)貨物は實際に取引の目的物たるに非ずや。是れ貨物の數量が人の欲望を滿たすに足らざるを立證せるものなりとす。

こは勿論人類全體に就き綜合的に下したる觀察なるも各個人に對しても適用し得るものなり。

又、縱令或る個人の有する貨物の數量が其人の總ての欲望を充たすに不充分なりとするも若し貨物の產出に何等の時間と勞力とを要せずとせば、換言せれば一貨物を入手せんと欲せば即座に之を產出又は製造し得ること、尙ほマイダスの魔法杖を以て總ての物を直ちに黃金に變化し得るに異ならずとせば、價値時差の現象は發生せざる可し。而かも事實は然らずして、貨物の產出又は製造には多大の勞力と時間とを要するを常とすを奈何せん。假りに勞力を一時度外視するとするも、米穀の產出には數ケ月の經過を要し綿服一枚の製造にも、總ての原料、機械、器具の產出製造に要する時間を通計せば、數ケ年に上る可し。勿論吾人は既製品を商人より購入し以て吾人の欲望を少時間內に滿足せしむることを得るものなるも、此既製品の代償として交附するを要する他の貨物又は貨幣を入手するには多くの時間を要するを常となすに非ずや。(註二)而かも人は總ての場合に於て待つことを好まざるものにして、此現象は日常吾人が吾人の周圍に目擊する所なるが、就中汽車又は電車を待てる者、飮食店に於て配膳を待佗びつゝある者、又は開演の遲延せる劇場に於ける觀客等の心理狀態に於て最も的確に明示せらるゝものなりと云ふを得んか。

(乙)次に現在の缺乏を感ずることが將來に於ける同一の缺乏を現在に於て感ずるよりも深刻なるは(一)人の感覺が時間的に制限せらるゝの現象並に(二)將來に於ける缺乏は將來に於ける努力に依りて滿たし得るとする人の信念に基くものなりとす。吾人の視力及び聽取力は吾人が物體又は音響より遠かるに從ひて減殺さるゝものなると同じく、過去に於ける吾人の經驗に對する記憶は時間の經過と共に次第に消滅するの傾向を有するものなるが、將來に於て發生するものと豫期せらるゝ事件に對する吾人の豫想も亦其發生の時期が現在よりも遠ければ遠き丈け微弱なるを常とす。客觀的に之を論ずれば、次の日曜日も、其の次の日曜日も同一の休息を與ふるものなる可きも、人は次の日曜日の與ふる快樂に就きて其の次の日曜日の與ふるものよりは今日に於て多大の期待を以て豫想を逞しするの癖あり。之と同じく、假りに吾人が生命を維持する爲めには今日三合の白米を消費するを要するとせば、客觀的に之を論すれば、明年の今日

も亦同樣なる可き筈なるに、吾人は明年の今日に於ける白米の必要をば今月今日に於ける白米の必要程には主觀的に感知せざるなり。(二)又、假りに、將來に於ける缺乏が現在に於ける同一の缺乏と同程度に豫想せられ兩者共に均しく充足せざるを得ずと思惟せらるゝ場合と雖も、人は先づ焦眉の急を告げつゝある現下の缺乏を滿たし、將來の缺乏は其時期の到來する迄に徐に之を充足するの方法を講ずるも敢て遲しとせずとの感を懷けり。是れ即ち將來財の價値が現在財の價値よりも低き所以なりとす。(註三)

註一、空氣が全く交換價値を有せずとは經濟學者間の通說なれど、予は此說を採らず。されど之に關する卑說の辨表は他の機會に讓らんとす。

註二、富豪が一定の限度內に於て自己所有の貨幣を以て即席に貨物を購入することを得るは勿論なり。されど、之に關する說明は次節に於て試みんとす。

註三、貨物の價値時差には例外あり。乞ふ次節を見よ。

第四節　貨幣の價値時差の原因

前述の如く現在財は將來財よりも高き價値を有するを常とするものなるが、或る人の現に有する或る種の貨物の數量が其貨物を以て滿たし得る欲望を滿足せしむるに充分なるのみか、却つて若干の餘剩ありとせば、其人に對する其貨物の現在價値は却つて將來價値よりも低きことある可し。其貨物が腐敗し易き食料品等の如きものなる場合に於て殊に然りとす。從つて、前節の於て說述せる貨幣以外の貨物に於ける價値時差は一般的現象に非ずして、唯大多數の場合に存するものなりと云ひ得るに過ぎず。然るに貨幣の價値時差には殆んど何等の例外なしと云ふを得るに似たり。蓋し或る種の現在欲望を滿たすに必要なる貨物を現に充分に所有せる人と雖も、總ての欲望を充たすに用ゆ可き貨物を充分に所有せるが如きとなく、必ずや一部分の欲望は未だ滿たさるゝに至らざるなり。然るに貨幣又は其の代表物を以て金額及び市場の狀況の許す範圍內に於て如何なる貨物をも購入し得るものなれば、若し總ての現在欲望を充分に滿たすを得るに足る貨物を購買する爲めに必要なる貨幣又は其の代表物を所有する人あらば其の人に對する現在の貨幣の價値は將來の貨幣の價値よりも高かる可しと云ふを得す。而かも、斯くの如く充分なる貨幣又は夫れに代はる可き物を有する者全世界に殆んど一人もなしと云ふを妨げざらんが。尤もカーネギー翁の如く享樂欲の頗る弱く、而かも十數億圓の富を懷ける者が假りに財產の全部を傾倒して現在に於ける衣食住に關する自然的欲望を充足するに必要なる食料品、衣服、土地、家屋、家具等を購入するとせば、或は現在に於ける此等の自然的欲望の全部を滿たすことを得ん。されど人は、少くとも文明人は、自然的欲望以外に地位、名望、企業、權力等に對する高等欲望を有するものにして、富豪に在りては殊に然りとす。而かも、自然的欲望の充足に財產を全部蕩盡せば、高等欲望は之を滿たすこと能はざるなり。從つて、巨萬の富を蓄ふる者と雖も、日常の生活には財產より生ずる收入のみを利用し、財產の元本を減損するを避くるに腐心するを常とせり。されど當時收入のみを以ては自然的欲望を全部完全に滿たすを得ざるなり。是れ富者階級に對しても貨幣の價値時差の存在する所以なり。況んや中產階級以下の者に於てをや。

最後に吾人の指摘せんと欲するは價値時差に對する貨幣の職分の影響に外ならず。勿論、各個人の價値時差は根本的に論ずれば、個人に對する各種貨物の價値時差を意味するものにして各種貨物の價値時差は一定の時に於ては異なれ

るものなり。然りと雖も各種の貨物が貨幣又は其の代表物に對して賣買せらるゝ現時の經濟組織の下に在りては各個人に對する諸種貨物の價値時差は均一となるの傾向を有せり。假りに或る農夫に對する米及び醬油の價値時差が左の如くなりとせよ。

物品	一單位量の現在價値	同上一ヶ年後の價値に對する豫想價	時差値
玄米	二〇〇	一〇〇	一〇〇
醬油	一一〇	一〇〇	一〇

若し斯くの如く米の價値時差が醬油に比して遙かに高かしとせば、此農夫は他の必要品を購入するの資金を得んが爲には、先づ醬油を販賣するならん。而して、醬油を販賣すれば其蓄藏量減少する結果として、醬油の現在價値は自ら遞增し、其の價値時差が遂に二百以上、即ち米の價値時差に超ゆるに至ることある可し。若し果して然らば更に資金を要するときには蓄藏米を賣出すならん。從つて、此兩價値時差が全然一致することはなかる可きも常に兩者は均等を保たんとするの傾向を有するものなりと云ふを妨げず。換言すれば、貨物の價値時差は貨幣流通の作用に依りて平衡點を求めつゝあるものなりとす。從つて總ての貨物と交換せらるゝ貨幣及び其の代表物即ち吾人の資金と稱するものゝ價値時差は總ての貨物の價値時差を代表するの傾向を有するものなりと云ふを得るに似たり。且つ斯くの如く資金の價値時差を以て代表的價値時差と看做すは利子歩合に對する價値時差の關係を一層明瞭ならしむるものなりとす。如何となれば、此方法に依りて、吾人は價値時差並に利子歩合間に於ける相互的作用が貨幣を通じて行はれつゝあるの事實を的確に明示するを得ればなり。

第五節　價値時差測定の方法

價値時差は經濟學者が其腦中にて遊戲的に發明せる架空的の觀念にして實際社會に存在せざる現象なるか、或は物理學者が光線の現象を說明するの一方法として案出せし「エーテル」の存在の如きものにして、實驗を以て其の存在を證明すること能はざる假想的のものなる可しと考ふる者あるやも測り知り難きも、價値時差は決して斯くの如き捕促し難き空想的の觀念に非ずして、吾人が日常經驗せる現象なるのみならず其の程度は實驗に依りて之を明確に示すことを得るなり。假りに、一學生に今日鉛筆十本を與へんかと問ひたるに、即座に今日十本を賜へと答へ、今日の十本と明年と今日の二十本とは孰れを取るかと問へば、明年の二十本を選ばんと即答せるも、今日の十本と明年の十五本とは孰れを良しとするかと聞かれて、返答に躊躇せりとせば、此學生に對する鉛筆の價値時差は十本に對して一ヶ年五本即ち一ヶ年五割に相當せるなり。蓋し、此學生に對しては今日の鉛筆十本の價値は明年入手し得る十五本の鉛筆が今日有する價値と略ば同一なりとす。

又、假りに或る私立學校の理事者に對して今日其學校に千圓を寄附せんか、明年の今日同額の金子を寄贈せんかと問へば、當局者は勿論直ちに即時の寄附を請はん。次に假りに、今日の千圓を取るか明年今日の千二百圓を取るかと聞かば、明年の千二百圓を選ばんと即答せん。次に、若し今日の千圓と明年の千百圓とは如何と問へば、理事者は或は即答すること能はざるならん。若し果して然らば、此理事者に對する貨幣の價値時差は年一割に相當するものなりと看做すことを得るなり。

若し此方法を用ゆるとせば、吾人は總ての人

の價値時差の程度を測定することを得可し。

第六節　個人間に於ける價値時差の不同

斯くの如く價値時差は貨幣に於ても亦貨幣以外の貨物に就きても存在する現象にして且明確に測定し得るものなるが、此價値時差の程度は人毎に異なるものなりとす。例へば甲に對しては貨幣の價値時差は一ヶ年一割なるに乙に對しては僅かに五分なることあり。然らば何故に價値時差が人毎に異なるか。惟ふに個人間に於て價値時差に等差を生ぜしむる原因は内在的原因と外在的原因の二種に大別することを得んか。内在的原因とは個人の性質、體質、習慣等を云ひ、外在的原因とは個人の所得に關する數々の事情を謂ふ。吾人は便宜上外在的原因の説明より始む可し。

個人の所得に關する事情とは（一）所得の大小（二）所得内容の性質、（三）所得増減の豫想並に（四）所得の確實性に外ならず。以下順に之が説明を試んとす。

（一）所得の大小　他の事情にして全然同一なれば多額の所得を有する者は少所得を有する者よりも價値時差低し。蓋し所得が大なれば、比較的多くの現在欲を充たすことを得るを以て、現在の貨物を左程尊重することなければなり。之に反して、少額所得を有する所謂細民は衣服、家具等は愚か充分なる食物すらも購入すること能はざるを以て、現在財に對する欲望頗る高し。貧困者が生活費の不足を補ふ爲めに高率なる利子を支拂ひて借財することあるに反し、三井、岩崎等の富豪が他人より金錢を借入るゝことなく、假りに一時的に資金の融通を仰ぐことあるも、そは投資を目的とするものにして、衣食住費を補ふ爲めにあらざるは所得金額の相違に依りて誘致せられたる價値時差の等差に基くものなりとす。

（二）價値時差内容の性質　假りに茲に甲乙二人ありて、甲は一ヶ年千圓の貨幣所得を有し、乙は一ヶ年間に金千圓に相當する丈けの實物所得を有せりとせば、所得額の點より云へば甲乙の間に何等の徑庭なきに拘らず、乙の價値時差は概して甲の夫れよりは稍々高かる可し。如何となれば、甲は此千圓をば直ちに自己の欲する諸種の貨物の購入に任意に振當て、以て自己の有する欲望を強弱緩急に應じ之を充足するを得るに反し、乙は先づ其實物所得の一部又は全部を賣却して然る後其の賣揚を以て自己の欲する貨物を購入するを要するが故に、其所得を直ちに利用するを得ざればなり。是れ農民が概して商工業者並に勤人よりも高き價値時差を有するの一原因なりと看做すを妨げざるが如し。

又、同額の實物所得を有する丙丁二人の間に於ても、其實物の種類を異にせる際には、價値時差に相違を生ずることなしとせざるなり。如何となれば例へば丙の實物所得は千圓に相當する米穀より成り、丁の所得は同一金額に相當する石材なりとせんか、丙は其實物所得の一部分而かも少からざる部分を自家の消費用に供することを得るを以て、現在欲望は少くとも其の範圍内に於て充分に滿すことを得るに反し、丁は石材を賣却したる上に於て始めて食料品を購入することを得るものなるが故なりとす。

（三）所得増減の豫想　各個人の所得額が常に一定不動なることもある可く、又時の經過と共に増減することもあり。假りに甲乙二人は共に現在に於て一ヶ年千圓の所得を有し、且つ將來に於ても此所得金額に變動を生ずることなしと豫想せられたる場合には、甲乙の價値時差は同一

なる可し。されど、假りに、甲の所得に何等變動なきも、乙の所得は漸次增加すると豫想せられたるときには、乙の價值時差は甲の價值時差よりも高かる可し。如何となれば、乙は甲に比して將來に對して備ふる必要少なきを以て、自ら現在に於て、比較的多量の貨物を消費せんとすればなり。實業家の價值時差が勤人の價值時差よりも高く、同じく勤人に在りても昇給の望多き者の價值時差が其望少き者の夫れよりも高きは將來に於ける所得に關する豫想の相違より來る現象なりとす。更に之に反して、假りに乙の所得が將來漸次減少すると豫想せらるゝ場合には前と反對の結果を呈す可し。蓋し乙は所得の減退せるときに於ける生活上の窮迫を免がれんが爲め現在に於て蓄財するの必要を感ずればなり。勤勞所得に依りて衣食せる者、殊に中年を過ぎたる者が不勞所得に依りて衣食せる者よりは概ね比較的に節約を重ずるは是れが爲めなりとす

（四）所得の確實性　以上の說明は總ての場合に於て所得が確實に收めらるゝとの豫想を前提とせるものなるが、所得は絕體に確實なるものに非ざるなり。概して之を論ずれば財產所得は企業所得に比し一層確實にして且永續的性質を有し、企業所得は純勤勞所得に比しては必ずしも確實には非ざるも一層永續的なるを常とす。從つて、現在に於ける所得が同額なりとせば、財產所得を有する者の價值時差は企業所得を有する者の價值時差よりも高く、企業所得を有する者の價值時差は純勤勞所得に依りて衣食する者の價值時差より高し。蓋し、不確實なるか又は永續性を有せざる所得を以て生計を營む者は將來に於て所得の激減せるときに對して備ふる爲め將來財を比較的重んずるに反し、確實性又は永續性を備ゆる所得の收納者は將來の爲めに現在財の消費を犧牲とするの必要少ければなり。

以上各個人の所得が其の價值時差に及ぼす影響を說述せしが、今や轉じて個人間に價值時差の等差を生ぜしむる內的原因に論及せんと欲す此內的原因とは（一）年齡、（二）職業の性質、（三）體質、（四）氣質、（五）習慣、（六）知識、（七）家族の有無、（八）博愛心等を謂ふ。

（一）年齡　他の總ての事情にして同一なりとせば、壯者の價值時差は低く老人の價值時差は高きを常とす。蓋し壯年者は今後尙ほ數十年の生命を豫想するが故に、將來を重ずるに反し、老人は餘命幾何もなきが爲めに、將來より寧ろ現在を尊重するを以てなり。壯年者中には生命保險に加入ずるに當りて養老保險を選擇する者多きに反し、中年を過ぎたる者は、少くとも歐米諸國にては、養老年金、卽ち一定金額を保險會社に交附し之に對して加入者の死亡する迄毎年一定額の支拂を受くるの制度を選ぶの風あるは豫想壽命の長短に基く價值時差の相違より生ずる現象なりとす。

然りと雖も、價值時差は必ずしも絕體的に年齡に正比例するものに非ず。換言すれば、年齡の低きに從ひて價值時差は必ずしも低しと云ふことを得ず。如何となれば、靑年並に幼兒は、縱令長き壽命を豫想するとも、將來を慮るの念薄きが故に、價值高きを常とするを以てなり。殊に小兒に於て然りとす。

（二）職業の性質　普通危險なる職業に從事せる者の價值時差は安全なる職業に從事せる者の價值時差よりも高し。蓋し、危險なる職業に從事せる者は何日何時如何なる事變に遭遇し頓死するやも知れずとの懸念を有し、人生の快樂を味ふは今なりとの考を懷く結果として、現在財

を重ずるが故なりとす。礦山夫、鐵道現業員、海員、軍人、殊に海軍々人等は比較的高き價値時差を有せるが如くなるが、こは毫も怪むに足らざる事なりとす。

（三）體質　身體虛弱の者は强健なる者に比し價値時差高し。蓋し體質の不良なる者は自ら豫想壽命短く、此點よりしても價値時差低かる可きものなるが、是れ以外に、醫療の爲めに多額の失費を要する結果として將來を顧慮するの遑なきを以てなり。德川幕府時代より明治に亘りて妙齡の娘を犧牲とせるが爲め起れる家庭の悲劇は多く家長が難病に罹り其の價値時差著しく高率となりたるに起因せるが如し。

（四）氣質　概して進取の氣性に富める者は退嬰的、消極的なる者に比し價値時差高し。蓋し積極的に運命を開拓せんと欲せる者は將來に於ける發展の基礎を築づく必要上現在に於ける失

費を苦痛とせざるを以てなり。青年の中には學資を借入金に求むることあるは其の一例なり。所謂官海游泳術に巧みなる者が身分不想應の交際費を費消するも亦其の一例なりとす。之に反して、乾坤一擲の大飛躍を試みるよりは寧ろ現狀維持を以て甘んずる者の價値時差の低きは將來に於て所得の大に增加するを期待せざるを以て、出來得る限り現在に於ける消費を節減し、將來に備へんと欲するが故なりとす。婦人が概して男子に比して低き價値時差を有するは是れが爲めなり。

又、虛榮心の强き者の價値時差高きは玆に贅言するの要なし。虛榮心の奴隸たる一派の婦人の有する價値時差の高きは蓋し毫も怪むに足らざることならんか。

（五）習慣　常に美食を口にして美服を身に纏ふの習慣を有し、或は喫煙、飲酒又は其他の惡習に耽る者は然らざる者に比し價値時差高し。如何となれば、習慣は所謂第二の天性にして、大多數の人は之が奴隸となりて、理智的には其の不可を知るも、年來の惰性に打勝つこと能はず、知らず知らず將來を犧牲に供するに至るを以てなり。之に反して克己の精神に富める者は現在の快樂よりは寧ろ將來の享樂を重んずるが故に、現在財を過重に尊ぶことなし。

（六）知識　學問と經驗とを有する所謂有識者は無智無經驗の者に比し其價値時差の低きは勿論なり。蓋し知識は人生に關する理解力を與へ、人事に關する分別を生ぜしむるが故に、人をして將來を深く慮らしむるを以てなり。之に反して、無智愚昧なる輩は未來に對する豫想力を缺き、何等將來に就きて顧慮することなく、又縱令將來の生活に關して多少の觀念を有する場合に於ても、想像力乏しきを以て、未來に於ける生計問題の解決に對する理解力を有せず、從つて之に備ふるに努力することなきを常とす。概して下級勞働者の價値時差高きは是れが爲めなり。彼等は現在あるを知りて將來あるを悟らず、今日の快樂を欲して、明日の窮乏を憂ひざるなり。

（七）家族　妻子眷族を有する者は概して何等係累を有せざる者よりも價値時差低し。世に生を受くる者にして家族を親愛せざる者殆んど一人もなく、又、無智蒙昧の輩を除きては、子孫の將來を顧慮せざる者なし。而かも子孫の爲めに美田を購はんと欲せば現在の消費を犧牲に供せざるを得ず。是れ價値時差の低き所以なりとす。之に反して獨身者は自己の享樂を思ふの必要あるのみなれば、價値時差自ら高し。

（八）博愛心　巨萬の富を蓄へ、既に自身は愚か子孫に就きても充分なる生活上並に慰安上の

保證を有する者に在りては價値時差は勿論低きものなるも、博愛心に富める者は然らざる者に比し相對的に云へば價値時差低かる可し。諸學校に多額の金子を寄附して學問の進歩並に敎育の普及を促がし、又病院若しくは救貧設備の經費を負擔して細民の困苦を輕減せんと欲する者は財産の運用又は事業の經營等に依りて更に一層多額の收入を擧げ、得たる所を公共的目的に利用するを以て無上の快樂とせるが如し。

米國のカーネギー、ロックフェラ等の諸氏が勤儉己をを持し其蓄へたる巨萬の富の一大部分を割きて學校に寄附し、或は科學研究所を設立せるは此廣義の博愛心の發動に基るに外ならず。

以上内的原因及び外的原因の諸方面より個人間に於て何故に價値時差の等差を生ずるものなるかを論述せしが、各項に於て說明せる所は總て他の事情が全然同一なることを前提とせるを記憶せざる可らず。從つて、若し他の事情に相違あらば上記の推斷の適中せざることあるは勿論なりとす。例へば、或る獨身の富豪は係累者を有せざる點より云へば價値時差高かる可きも、收入の多額なる一事より之を觀れば時差は却つて低かる可し。而かも價値時差の等差を生ぜしむる原因は頗る多く、吾人の略叙せしものゝみにて十以上を數ふるを以て、價値時差の高低を定むる事情の組合は殆んど數ふる遑なき程多數に上るものなりと云ふを妨げず。されど假りに甲乙二人に就き極端なる場合を想像して、上記十二個の事情を左の如く組合することを得可し。

原因の種別		甲	乙
所得の大小	事情	大	小
所得内容の性質	價値時差	貨幣又は米	石材
將來の所得		減	增
所得の確實性		確實	不確定
年齡		壯年	老年
職業		安全	危險
體質		強健	貧弱
氣質		退嬰的	進取的
習慣		惡習なし	惡習あり
智識		有識あり	無智
家族		有	無
博愛心		深	薄
綜合		低	高

若し斯くの如き事情の下に生存せる甲乙二人の者ありとせば、甲の價値時差が乙に比して遙かに低かる可きは想像するに難からず。假りに、數字を以て其等差を示すとせば、甲の價値時差が一ケ年二分とせば、乙の率は四割五割又は十割にも上る可し。勿論、實際社會に於ては、此兩者の孰れにも相當する事情を有せる者は一人も無くして、皆な此中間に位せりと看做すを至當とす。而して各個人の事情の組合が甲の事情の組合に近ければ近きに從ひて其の價値時差低く、乙の事情の組合に類似すればそれ丈け價値時差高し。而して各個人が一定の時に於て有する價値時差は上記事情の組合せに依りて定まるものなるが、其組合は人に依り千差萬別なるのみならず各事情に在りても皆な其の程度を異にするは勿論なるを以て、一定の時に於ける一社會の各員の有する價値時差皆な其の程度を異にするは明かなり。

經濟價値論（二）

野村兼太郎

二

以下 Physiokrats 以後の價値論を論ずるに當つて、從來の如き歷史的叙述の煩を避けたいと思ふ。例へば Rousseau, Montesquieu 等が盛に自然主義を唱へた當時の佛蘭西の社會を背景とせる Physiokrats の價値論。英國に於ける產業